

支配者の罠

蒼穹に響く銃声と終焉の月

九条菜月

Natsuki Kujo

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 伊藤明十

目次

序章

9

第一章

29

第二章

46

第三章

67

第四章

94

第五章

110

第六章

128

第七章

147

第八章

161

第九章

179

終章

191

あとがき

212



キャラクタ紹介



カルディナ・バシュレ
(一等兵)

第三監房棟所属



クロラ・リル
(一等兵)

別名多数あり。16歳で成長が止まった外見を生かして、潜入調査に従事する



サルバ・ラケール
(大尉)

第三監房棟所属



セリオ・アバルカス

(少尉)

第一監房棟所属

レジェス・ハイメ

(一等兵)

第一監房棟所属

プラス・プラト

(一等兵)

第二監房棟所属

セルバルア・ゼータ

(グルア監獄所長)

ディエゴの天敵 (?)

ディエゴ・クライシュナ

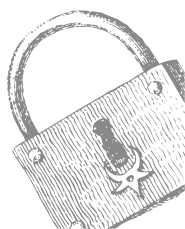
(中佐)

クロラの上官。第六連隊隊長

支配者の罟

蒼穹に響く銃声と終焉の月

序章



穏やかな昼下がりに。微かに薬品臭が漂う廊下に、二つの足音が響く。

前を歩くのは背の曲がった男性だ。年齢は六十を過ぎたあたりだろう。染み一つない糊の効いた白衣に黒いズボン。胸元には使い古された聴診器がぶら下がっている。短く整えられた髪は至るところに白髪が交じり、顔に刻まれた深い皺と相俟って、一種の威厳を漂わせていた。

その後ろに続くのは、男性の白衣にも負けないくらい真っ白な頭をした少年だ。褐色の肌と新緑を思わせる瞳も含めて、黒い髪に黒い瞳が大半を占め

るサライ国では滅多に見ない色合いである。小柄な体には不似合いの無骨な軍服が、彼が軍人であることを示していた。

「カルレラ受刑者は元気にしていますか？」

少年、クロラ・リルは、前を歩く医師に話し掛けた。アントニー・ベセラはグルア監獄の軍医だ。島にいる医師は彼一人で、普段は町医者も兼ねている。グルア監獄に一人、街の診療所に一人、それぞれ助手を置き、大抵は街の診療所で仕事をしている。

単純に後者の人口が多く、年代も子供から老人まで幅広いため、受診率が高いという理由である。

「お前さんとこのお嬢さんのせいで、一日に三回は死ぬような目にあってるが、なんとか生きてはいるよ。しぶとい奴だ」

「さすがに入院が長引くのは……バシユレ一等兵の面会を制限してはどうでしょう？」

「勿体ない！ うら若いお嬢さんを追い返す馬鹿がどこにいる。被害がわしに来なけりゃ、なんの問題

もないさ。眼福眼福」

ひひひ、とのを震わせて笑う医師に、クロラは溜息をついた。

クロラがいるのは、グルア監獄の敷地にある医療棟だ。第一監房棟の脇に位置する、二階建ての施設である。一階が診察室で、二階が入院患者用の個室となっている。

個室は全部で十室。内五室は受刑者用で、窓には鉄格子が、戸には二箇所の鍵がつけられている。もっとも、医療棟に入れられる受刑者の大半は、一人では動くこともままならないほどの重病人であるため、脱獄の恐れは限りなく零に近い。

「お嬢さんは責任を感じているんだろうよ。健気じやあないか。好きにさせてやればいい。可愛らしいお嬢さんに世話をしてもらえるなんて、羨ましい限りだ」

それで、今度こそうつかり死んでしまったらどうするんだ。苦虫を噛み潰したような表情をしている

と、クロラの内心を読んだのか、ベセラは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「脱獄犯に同情はいらんじやろ。お前さんもあんまり肩入れしないことだ」

初老の医師の機嫌が急に悪くなったのは、ここ数日、寝る間もないほどの忙しさに見舞われているからだ。目元に刻まれた隈と、げっそりと瘦けた頬がそれを物語っている。

脱獄不可能と名高いグルア監獄が、脱獄者を出したのは七日ほど前のことだ。

そもそも監獄からの脱出自体は、やってできないことはない。刑務作業中や運動中に、看守の隙を突くことくらい造作もない。問題は脱獄したあとだ。

本土から船で半日ほどの場所にあるこのグルア監獄は、月に一度の割合でやってくる定期船以外に外部との交通手段がない。島にある船はどれも漁業用の小船で、それを利用しての脱出は自殺行為に等しい。よほどの強運の持ち主でもない限り、海の藻屑

となってしまう。

受刑者たちは現実を痛いほど理解している。脱獄したところで島から脱出できずに捕ま^{つか}って、刑期を延^のばされるくらいなら大人しくして^{おとな}いた方がいい。場合によっては、その場で射殺される恐れもある。

グルア監獄の立地は、受刑者たちから「脱獄」という考え自体を奪^はっていた——にもかかわらず、だ。脱獄者が出た。

それも、二人。一人目はアレクシス・ホドロフ。元グルア監獄島警邏隊^{けいろう}隊長で、殺人罪で服役中だった男である。二人目はマリオ・カルレラ。ホドロフに深い恨みを抱き、彼を殺害しようと監房棟に無断で侵入、看守に怪我^{けが}を負^おわせた罪で服役していた男だった。

カルレラはクロラが担当する第三監房棟一階雑居房の受刑者で、関わり合いも深かった。「同情はいらんじゃろ」と言^いったバセラ医師に激しく同意したいくらい、クロラも彼の行動——ホドロフの脱獄を

知^しって、その後を追^おい脱獄した——の結果は自業自得だと思^{おも}っている。

結果、ホドロフは自殺。カルレラは瀕死^{ひんし}の重傷を負^おった。

ホドロフがいつた^{いつ}たいなんのために脱獄したのか。その謎は未だに明らかにされて^いない。

「診療所の方もお忙しいのですか？」

「当たり前^{あたりまえ}のことを訊^きくな」

確かに、これは言^いわずもがなのことだったな、とクロラは己^{おのれ}の台詞^{せりふ}を反省^{せうけい}した。

二人の脱獄は、主にグルア監獄島の警備を担^かう警邏隊^{けいろう}に甚^{じん}大な被害^{がい}を及^{およ}ぼした。重傷者が三名、軽傷者が八名。加害者と目^めされる四名を除^{のぞ}いての被害数である。

四名も命に別状はないものの、それ相応の怪我を負^おっている。警邏隊の総数は二十四名。その半数以上が被害を受けた計算になる。彼らは街の診療所に運^はび込まれた。

対して監獄側の被害は零。現在、機能を失った警邏隊に代わり、街の警備を行っている。期限は、軽傷者たちが職場に復帰するまで。監獄の者たちも休日返上で職務に励んでいる。

「まあ、警邏の奴らは、もともと体の鍛え具合が違うからな。全員が驚異の快復力を見せとるよ。さすが脳味噌まで筋肉だけのことはある」

「ははは……」

ベセラが立ち止まったのは、囚人用の病室、鉄製の頑丈な戸の前だった。

上部と下部にそれぞれ鍵が取り付けられ、中央部分に細い鉄製の門が掛けられている。戸に設けられた覗き窓には、監房棟と同じように頑丈な鉄格子が嵌められていた。

「規則とはいえ、いちいち鍵を開けて入るのが面倒だ。ゼータちゃんも、ぱぱぱーっと緩和してくれなかね」

ぶつぶつと文句を言いながらも、ベセラは手慣

れた様子で解錠していく。ここに至るまでも二度、階段を上る前と上ったあとに鍵付きの戸を通っている。

入院中の受刑者への面会は、ベセラ、もしくは所長の許可が必要だ。解錠も面会者ではなく彼の仕事である。

「ほれ、入れ。面会時間は三十分だ。時間になったら迎えに来てやる」

追い立てられるようにクロラは病室に足を踏み入れた。背後から戸の閉まる音と、再び鍵と門が掛け直される音が響く。

収監者に襲われた時のことを考え、必ず同席者がいるものだが……それを軍紀の緩いグルア監獄に求めるだけ無駄というものだ。

「お久しぶりです、というほどありませんか」
簡素な室内。ベッドに横たわっていたマリオ・カルレラは、クロラの顔を見るなり嫌そうに顔を顰めた。歳は三十代後半。三年前に収監されたあとも鍛

え続け、袖から覗く腕は銅のような筋肉で覆われている。

入院患者ということで、いつもの囚人服は脱がされ、代わりに着脱の楽な病人服を着せられていた。狙撃による負傷と、怪我を押しての大立ち回りのお陰で、雑居房での療養は不可能とベセラが判断した。容態は安定しているが、感染症の恐れもある。少なくとも傷口が塞がるまでは、雑居房に戻すことはできないとのことだった。

カルレラはクロラが担当する第三監房棟一階の、中心的な人物である。彼がいたからこそ、受刑者たちがまとまっていたといっても過言ではない。彼を兄貴分として慕っていた受刑者たちは、見舞いに行くことすらできない現状に苛立ちを募らせ、些細なことが原因で衝突する者も始めている。

今はなんとか押さえつけているが、不満が爆発する前に戻ってきてほしいものだ。そもそも、こいつが脱獄しなければよかったんだ、とクロラは恨みが

ましい眼差しを向けながら、ベッドの脇に置かれていた椅子に座った。

「お元氣そうでなによりです」

「嫌味か」

クロラの発言はそう取られてもおかしくない。病人服から覗くカルレラの手足には、真っ白な包帯が巻かれ、頬や額にも大判のガーゼが貼られている。さらに、口の端には殴られたような青痣まであった。「ここに運び込まれた時より、酷いことになってますね」

「うるせえ」

もちろん、誰かに暴力を振るわれているわけではない。彼の怪我に責任を感じた、少しばかりドジな軍人が誠心誠意、看病した結果だ。不自然に窪んでいる壁から視線を逸らしたクロラは、用件を告げるために口を開いた。

「吉報を持ってきました」

「なんだ、ようやく刑が決まったのか」

「ええ」

脱獄にはそれ相応の罰則ばつそくが定められている。通常ならば、本来の刑期にさらに十年が加算される。さらに脱獄中、犯罪行為を働いた場合は改めて裁判に掛けられ、脱獄罪とはまた別に罪状に沿った判決が言い渡される。

カルレラの罪状は、脱獄だつごくのみ。刑期の加算が当然だが――。

「表向きは、刑期の十年間延長となりました」

「どういう意味だ？」

「実際には、刑期の延長はありません。あなたの脱獄自体がなかったことにされましたから」

「はあ？」

「もちろん、グルア監獄や警邏隊、島民たちの記憶を消すことはできません。ですから、表向きは刑期が加算されたことになっています。でも、それが本当かどうか、普通の人は確かめる術すべはありませんよね？ あなたの場合、処罰しつぱといっても刑期の加算だ

けで、眼に見えるなにかがあるわけではありませんし」

「だが、俺がそれより早く出所したら――」

「受刑者として、模範もはん的な生活を評価した等の理由がつけられるでしょうね。簡単に言いますと、軍の上層部から圧力が掛かったんです。二件の脱獄をなかったことにしろ、と。おそらく、アレクシス・ホドロフの件も、ただの自殺として処理されるはずす」

驚きのあまり反射的に体を起こしたカルレラだったが、全身を襲う激痛に再びベッドに沈んだ。

彼が驚愕きょうがくするのもむりはない。確かに警邏隊は大きな打撃を受けたが、今回の脱獄事件での死亡者は自殺したホドロフただ一人。通常ならば、なかったことにするほどのものでもない。

もともと、本土での騒動さうどうを知っているクロラからすれば、カルレラほどの驚きはなかった。

「所長からの伝言です。命が惜しければ黙ってい



ろ」と。さすがに当人に話さないというのはむりがあると考えたようです。自身の犯罪歴を確認する際、脱獄罪が抜けていれば疑問に思いますからね」

だったら、はじめから事情を話したうえで口止めした方がいい。所長セルバルア・ゼータはそう判断したのだ。

グルア監獄に勤務する者たちについては、異動や退役の際、監獄で見聞きした情報を外部に漏らさない等の誓約書を書かせているようだ。

そもそも軍人には守秘義務があり、職務中に知り得た情報を外部に漏らすことは規則違反だ。退役後であっても、場合によっては罪に問われる。それでも、人の口に戸は立てられない。金銭で転ぶ場合もあれば、酒に酔ってうっかり口を滑らせてしまう場合もある。

誓約書がどこまで抑止力を持つかは不透明だが、破れば確実にゼータからのお仕置きが待っているとあれば少しは躊躇うだろう。

「言いたいことは山ほどあるが、なんでお前にまで裏の事情を暴露したんだ？」

「一応、あなたの担当だから、という説明を受けていますが……」

疑われているのだろうか、とクロラは内心で嘆息した。事実、ゼータから説明を受けたのはクロラだけで、同じく第三監房棟一階を担当するバシユレには告げないように、と命令されている。

クロラは密偵だ。本来は、ファン・アティリオという偽名でサライ国軍第六連隊、第十部隊に所属している。密偵で構成された部隊で、第六連隊長、デイエゴ・クライシュナの指示の元、それぞれ各地で諜報活動に勤しんでいる。

今回、クロラが派遣されたのは、軍人専用の監獄——通称「軍人の墓場」、グルア監獄だ。

今から二十年前、サライ国、ゼダ王国、コルセル才連合国において、三ヶ国平和条約が締結された。軍事国家として栄えていたサライにおいて、皮肉な

ことに平和の代償は少なくなかった。

これまで国を守る要であった軍の予算が、財政を圧迫しはじめたのだ。そこで提案されたのが軍の大規模な縮小である。声をあげたのは、議会の改革派と呼ばれる議員たちだった。

彼らは自国がキールイナ大陸でも有数の鉄の産地であることに眼をつけた。軍の縮小で得られるはずの予算と、職を失った元軍人たちを、鉄鋼業の開発に回そうと考えたのだ。

これに反発したのが、軍の上層部である。年々軍の発言力も弱くなっていたところに、改革派側からの要求は受け入れがたいものがあつた。

軍事国家として存続してきたサライにおいて、その要でもある軍を縮小するのは蛮行にも等しい。軍の上層部は、頑として改革派の要望を受け入れようとはしなかった。

状況が膠着するかと思われた時、改革派側に、重要機密である、軍の予算配分を記した文書の一部

が流出した。そこに記載されていたのが、グルア監獄への異常とも思える多額の予算配分だった。

当然、改革派の議員たちはここぞとばかりに軍の上層部を糾弾した。その事態を重く見たデイエゴによって、クロラはグルア監獄に新兵として送り込まれたのである。

任務は、監獄への過剰な予算配分の謎を探ること。グルア監獄で二ヶ月近く暮らしているが、未だにその理由を突き止めるまでには至っていない。期限は半年と区切られているので、クロラは早いうちにできる限りの情報を探り出さねばならなかった。ゼータがこの微妙な時期に配属された新兵を疑うのは当然のことだ。自分がなにか失態を犯したと考えるのは早計だ。

なにしろ、クロラは監獄の生活に馴染むことを優先していたため、今まで密偵として、敷地内の把握や監獄で働く者たちの人間関係を調べる以外、これといった活動をしていなかったのだから。

「なんだ。まずいことになってんのか？」

カルレラはここぞとばかりに意地の悪い笑みを浮かべた。

疑われるようなことはなにもしていないとはいえず、ゼータが自分を泳がせているのは、まず間違いない。今回の脱獄に関する情報は、本土では軍の上層部のみが知り得るものだ。クロラが密偵ならば、箝口令が敷かれた情報を雇い主に報せようとするだろう。

クロラがどう出るか。そこをゼータは罫を張って、虎視眈々と狙っているのだ。

その網の目を掻い潜って、情報を集めなければならない。日数が限られている以上、クロラには動かないという選択肢はなかった。

「それとも、とうとうお前がああ爺さんの孫だつてばれたのか？」

「違いますよ。そもそも、ずっと疑問に思っていたのですが、あなたはいつたいてどこで祖父と知り合ったんです？」

ニルス・リル。サライでは英雄として名を知られた軍人だ。クロラの母方の祖父で、育ての親でもある。そもそもクロラがディエゴの下で密偵として働くようになったのも、元はといえば祖父のせいなのだが……。

「士官学校の時の教官だったんだよ」

「え、士官学校を出てたんですか？」

祖父は退役後、一時期ではあるが士官学校で教師を務めていたことは知っている。クロラの上司であるディエゴもその時の生徒だ。

クロラが驚いたのは別の理由からである。士官学校に入学できるのは、ほんの一握りの存在だ。その大半が、裕福な家の出である。士官学校は途方もなく金が掛かるのだ。

基本的に授業料は無料となっているが、特別授業などの現役の将校を招いての講義や指導には料金が掛かる。それも顔が引き攣りそうになるくらいの額だ。しかし、これを受ける受けないでは、成績が大

きな隔^{へだ}たりがあるらしい。

授業に必要な教科書も最低限のものは無償で配られるが、実費で買わなければならない参考書の方が多いと聞く。また、生活費までは担ってもらえない。一年間だけなら未^まだしも、これを三年も続けるとなるとかなりの出費だ。

むろん、見返りも大きい。士官学校の最終課程を修了すれば、少尉^{しょうい}からの出発となる。一般の入隊試験を受ける場合は、二等兵からの出場で、初年兵教育を経て^へようやく一等兵に昇格できる。

その後も士官学校を出ているといないとでは、雲泥の差だ。特に戦争もない平和な今の時代、昇進に絡^{から}むような功績をあげるのは難しい。クロラも密偵でなければ、未だに一等兵として燻^{くすぶ}っているに違いない。

「でも、以前の階級は軍曹^{ぐんそう}でしたよね？」
カルレラは、グルア監獄島警邏隊の元隊員である。士官学校の出ならば、階級の低さに疑問が生じる。

それとも、降格されるほどの不祥^{ふしょう}事でも引き起こしたのだろうか。それに、士官学校の出にもかかわらず、軍人の墓場^{むばう}に飛ばされたというのも疑問だ。「まあな。騒動を起こして、途中で辞めさせられたんだよ」

「ああ、なるほど」

「てめえ、俺の顔を見て納得すんな」

士官学校に入学しても必ず卒業できるわけではない。周りについて行けずに脱落したり、問題を起こして退学を命じられたりする者はけっして少なくはない。

また、その足で軍の入隊試験を受けにくく者はごくわずかだ。士官学校を途中で退学した、という不名誉な評価を受けてまで、軍人を志望する者は稀^{まれ}である。

「俺が揉^もめごとを起こした相手ってのが、軍のお偉^{えら}いさんの息子^{むすこ}で、入隊試験を受けられないよう裏から手を回されそうになったんだよ。それを阻止^{そし}して

くれたのが、お前の爺さん——リル教官だったわけだ。揉めごとのお陰で家からは放逐されちまつたし、軍以外に行くと場所もなかった。あの時は本当に助かったな」

「そうでしたか」

祖父がわざわざ手を出したというならば、カルレは祖父にとって、親しい人間ひとということになる。気の毒に。

ニルスは正義感に溢あふれる輝かしい存在ではないが、唯一、差別をしなかった。誰に対しても平等で——一度、懐ふところに入れたら、有能な者も無能な者も分け隔てなく可愛がった。

それと同時に、分け隔てなく要求した。適材適所なんて生温なまぬるい。やれと言ったらなんでもやれ。ついて来いと言ったらどこまでもついて来い。脱落は許さない。大丈夫だ、どんなことがあっても最後まで面倒を見てやる。

むりです、軍を辞めます、という言葉は祖父には

通用しない。首根つかっこを掴まれて、鍛錬たんれんじょう場に放り込まれてお終しまいだ。よく死人、廃人がでなかったものだとクロラは遠い眼をする。

ちなみに、クロラ自身も迷惑な愛情に振り回された被害者だ。

「親しい間柄あいだがらなのはわかりましたが、どうして僕がニルス・リルの孫だと気付いたんですか？」

クロラの言動に既視感を覚えたとしても、血縁関係がないかと問われた際にはつきり否定している。確信を持って断定する根拠はなんなのか。もし、祖父の知り合いでもあるグルア監獄所長に、同じ疑問を抱かれるようななにかがあるのだとすれば、対策を考えなければならぬ。

「俺がまだ本土にいた時だ。リル教官が俺を訪ねて来て、もしも自分になにかあつたら、全財産をやるから孫を連れて逃げてくれ」と頼まれた。かなり切羽詰せうはつづまった顔でな。そんな時に、聞いた特徴がお前の外見とそっくりだった」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。